
女勇者と女神

ユウリヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女勇者と女神

【Zコード】

Z0375M

【作者名】

コウリヤ

【あらすじ】

ここは桃太郎が活躍してから時間がかなり経過した世界の話。

鬼族のテロ等、国の平和を憂える王女。

彼女は下校途中で翼の生えた男の子を見つける。

彼は一体何者なのか。

彼と王女の運命は！

恋愛に発展するかどうかは作者にも分からぬといつ（笑）見切り発車ですが、よろしくお願ひします。

プロローグ（前書き）

小説家になろう!をよく理解していませんが試しに書いています（笑）かなりのスピードで更新すると思いますがよろしくお願いします。

作者はどいつもおっしゃる一いちよになので誤字脱字がある可能性が高いです。

そして頭もそんなによろしくありません（笑）間違った使い方をしている所もあるかもしれません。そういう部分を教えてもらえると嬉しいです。

拙いですが、よろしくお願ひします。

プロローグ

『お伽話の中に入りたい』

皆さまも一度は思った事があるのではないでしょうか?
この物語はそういうお話。

入るお伽話は有名な「桃太郎」。

ですが、入る所は皆さまの知っている話からずつと時間が進んでい
ます。

鬼退治の後どのような感じになつたのか…

さあ、物語の扉を開けましょう…

『遙か昔、山の神ジイクスと川の神バアーリアがいました…』

という伝説から始まつたとされる我が国【桃園】トウエイ

伝説の初代国王は桃太郎という…らしい。

らしいなのは伝説なので名前が定かではないから。

…と、教壇で私を睨む百枝先生がさつき言つてた。

「桃華さん、この問題を解いて下さる?」

百枝先生は少しヒステリックな感じで黒板の問題を刺した。

「先生、そんなんだから貰い手がないんだよ。

そう思いながら問題を解く。

解答はもちろん正解。

席に着いて先生を見るどどても悔しそうな顔をしていたので少しい気分になつた。

その後もテキトーに聞き流しつつ、外を眺めた。

校門を出てすぐにある公園では子供がブランコの取り合いをしたり、滑り台で遊んだりしていた。

その近くを散歩する人…今日も平和だと思つた。

この平和の為に父は今日も奮闘している…そしていつかは自分も…徒然に考えていくとなんだか複雑な気持ちになつていくので考えるのを止めて先生の講義をただ聞き流していった…

授業後、ぼくと空を眺めていたら女子が数人私の前に来た。

「さすが桃華さまですね。わたくし、あの問題分からなかつたんですけどの」

「わたくしも！」

真ん中のちょっと派手めの女子…確か燈蘭トウランとかいつたつけ…と、取り巻きが私の席を囲む。

「そんな…たまたま昨日家で解いたから分かつただけよ」

そう返すと燈蘭は少し眉の上を痙攣させた。

「…あ、あの女の悔しそうな顔見たら、こう胸がすつとしましたわ」

そう取り巻きが流れを変えようとした。

「そ、そうね、あれは見物でしたわ！」

そう燈蘭が発した瞬間、担任が入つて來たのでみんな自分の席へと散つていつた。

担任は淡々と連絡事項を言つた後、最近起こつた鬼族によるテロへの警戒を呼びかけた。

鬼族は他の猿族や犬族等よりも身分が低く、一部では不満が出ていた。

そして鬼族は好戦的でもあつた為、しばしば他族を攻撃していた。

今まで小規模で被害が少なかつたのだが、一週間前に起こつたテロは場所が世界的有名な観光名所だったのと、我が国で一位、二

位を争うくらい大きな祭の中だつた事もあり、被害は想像を絶する程悲惨な事態になつてしまつた。

もちろんすぐさま原因解説と被害者への救済等を行つた。

そのせいで国王である父は今、寝る暇もない程多忙を極めている。父は常々『人の上に立つ者は人よりも多く仕事をせねばならない』と言つていたが、私は父が倒れないか不安で仕方がない。実行犯が鬼族なのは分かつたが、鬼族は知らぬ存ぜぬの一点張り。祭には他国の人もいたので明日ある会議では鬼族への何等かの制裁をしようという内容になると聞いている。皆が平和に暮らせないか……

私は理想だと知りつつもそう考えていた。

プロローグ（後書き）

桃太郎に沿つて種族を分けています。

ただ、雉は鳥族で（笑）

桃園は人族の国です。

他の種族の国名はいつか出すかもしれません。

地位は桃太郎に出た順番です。

でも鬼族以外はあまり変わりません。

まだまだ使い方が分からぬ…。
変な所がありましたらご指摘いただけると嬉しいです。

学校から帰る途中、今日が愛読書？のペーチンの発売日なので運転手に言って本屋に寄つてもらつた。

店に入ると、いつものように雑誌コーナーへと行つた。

そこには正直いぐらしの女の子達がピーチンを手に取っていた。

このペーチンとこの雑誌、同じくらいの女子なら読んでいて当たり前

前つていう程人気のファッショソ雑誌。

ファッショングの他にも恋の話とかダイエット方法とか色々載つてい
て、ピーチンを読んでいないと会話についていけないって事もある。

私が店から出て待たせている車に近寄ろうとした時、50メートル

程後ろの宝石店の前は人たかりが出来ているのは気

そう運転手に聞くが運転手もよく分からないらしい。

興味がわいたので運転手に止められつつも人だかりに向かっていつ

た

しかし、人が多くて何があつたのかよく分からぬ……

仕方なく私は人の間を抜けて人だかりの中心へと進んだ。

人だかりの中にいたのは見たこともない生き物だった。

見て、最初に思ったのは鳥族だ。

理由は翼が見えたから。

しかし通常鳥族は全身を羽毛におおわれており、翼も人でいう腕の部分にあるのだが、目の前にいるのは翼が生えているものの他の人族のようだし、翼も背中の肩甲骨辺りに生えている。

何より驚きなのは髪の色。

白っぽいのだけど、光の入る角度によって様々な色が見え隠れする…そんな何色とも言えない不思議な…だが綺麗な色をしていた。翼もよく見ると同じ色をしているようだ。

翼以外は人族のようだとはいえ、性別も分からない。

髪は長く、体も男性にしては華奢だし女性にしてはゴツイ。

顔は髪で隠れてよく分からないがどうやら気絶しているようだ。

不審人物だが、こんな大通りに放置する訳にはいかない。

男手が運転手しかいないが、仕方ない。

私は一步前に出て、人だかりの中心に立つた。

人の視線が自分に集まるのを確認して、言葉を紡いだ。

「この者は桃園の第一王女、桃園桃華が保護する！」

そう高らかに宣言すると人は興味津々で翼を持つ者を見つつも離れていた。

代わりに運転手が翼を持つ者を抱え上げ、後部座席に乗せた。

乗せる際、髪が乱れて今まで隠れていた顔が見えるようになつた。物凄く綺麗なのだが、やはり性別は分からなかつた…

視点を変えようか、それともこのまま行こうか悩み中…

田原め（前書き）

遅くなりました！

えっと…視点一時的に変わります。

古参の方なら知っている彼になります。

え、 そんなの分からぬい？

おいおい説明します。

目を覚ますとそこは見知らぬ場所でした。……なんて前にもあったからもう驚かないが、俺は違う事で驚いた。

なんだ、この成金趣味な……あ～うん、訂正。

なんだ、この悪趣味としか言いようがない部屋は。

床や壁もとか……どこまで金銀宝石まみれにすればいいんだ。光が反射しまくって目が痛えよ。

俺は目を細めて慣れるのを待った。

ちなみに今一番欲しい物はサングラスだ。

今まであまり使った事がないが、今本気で欲しい。

……ん？ 欲しけりや創ればいいじゃん！

手をポンッと叩き、目を閉じてサングラスをイメージする。やつぱどうせならカツコイイのがいいよな。

某イケメン俳優がデザインしたとかいうサングラスを脳内に思い浮かべた。

手から硬質な物の感触が伝わった瞬間、爆音がした。

耳痛え：

一体なんなんだよ。

創つたばかりのサングラスをかけ、爆音があつた方向を向くと何とも形容しがたい顔の女がいた。

髪は火のよう赤く、目はルビーのようだ。

歳は俺と同じ16ぐらいに見える。

変な表情をしてなければ見れる顔なのにもつたとい。

彼女の足元に扉の破片が散らばっている所を見ると、この女が飛び蹴りでもしてこの部屋に入つて来たらしい……全く華奢なくせにこんなゴツイ扉を壊すとかどんだけ怪力女なんだよ。

「……なに？俺に惚れちゃった？」

「なつ！？そんな訳ないだろうつ……！」

「いやあ～そんなに見つめるからわあ… 一日惚れしちゃったのかと
実はこの怪力女があまりに凝視するもんだからウザくて言つたんだ
けど、真っ赤になつて怒つててなんか楽しくなつてきた。

怪力には注意しないといけないっぽいけど、弄りがいがありそうだ
わ（笑）

そう本人が聞いたら烈火の如く怒りそうな事を思つていたら…

「わ、私は不審人物のお前を保護して監視を… つてお前、何を笑つ
ているのだ！」

あ、言わなくとも怒つた。

「お前、私を誰だと思つていいのだ！」

「え？ 怪力女」

何当たり前の事を聞いてんの？（笑）

「か、怪力女… だと！」

俺の言葉がよほどショックだったのか眉間にシワを寄せ、キッと睨
みつけてきた。

「私は桃園の第一王女、桃華！ お前のその言動は不敬罪だぞ…」

ビシッと俺に指を刺した王女サマの言葉はまだ続く。

「だいたいお前は何なんだ！ 变な所に翼を付けよつて！ 運ぶ時相当
邪魔だつたんだからな！」

変な所つて… 背中に翼は普通でしょ。

「何なんだつて言われても… 俺の名前は夕貴。^{コウキ} 背中に翼があるなん
て普通だろ。常識、常識…」 「なつ！？ 常識な訳がないだろう！ だ
いたい… ふがつ」

「はい、姫さまそこまでにして下さいね～」

王女サマはいきなり現れた妙齢の美女に口を塞がれてバタバタして
いる。

「お田覚めになつたようですねえ～ わたくしは杏といいます。こ
れでも一応医者です」

杏はたれ目と泣きぼくろが印象的だ。

おつとりしていそうだが、目を見ると鋭く、なかなか腹芸の出来る

人物に見えた。

「俺は夕貴といつ」

「夕貴さまね~ごめんなさいね~ちょっと診せてもうりますね~」

杏はそう言いながら、にこにこと近づいてきた。

色々触診や問診をされた後、

「異常はなさそうだけど今日は念のため寝て下さいね~」

と杏から言われ、ベッドに入った。

まだ俺を睨みつけている王女サマを

「姫さまは王さまに報告に行かれるでしたよね? わたくしもなんですか一緒に行きましょ」

と、半ば強引に引っ張つて行つた。

二人が出て行つたのを見て俺が一息つこうとする、

「あ、夕貴さま」

「!」

まだ行つてなかつたらしい杏がいきなり顔だけ出した。び、びっくりした…

「な、なんだ」

「このお部屋だと気が休まらないでしようから変えておくよつて王さまに言つておきますね~」

それじゃつと手を振り、今度は行つたかどうか確認した後、ベッドにダイブした。

俺はああいうタイプは苦手だ。

杏への苦手意識を持ちつつ、俺の意識は途切れだ。

田 覚め（後書き）

夕貴君ですが、口悪すぎでしょ？
改善点がありましたら、指摘頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0375m/>

女勇者と女神

2010年10月9日02時52分発行